

石田一良著

文化史学の理論と方法

歴史哲学、史学概論、史学研究法などに關する書物は、著名なものだけでも、かなり夥しい数に上るであろう。しかし（歴史）哲学者の単なる抽象的な概念構成だけでなく、歴史家の単なる經驗的な素材解説でもなく、經驗的な歴史家がみづから自己の立場に哲學的な反省を加え、具體的な歴史研究そのものから歴史学の理論と方法を原理的に基礎づけんとするとき試みは、より切実な根本問題であるべきにもかかわらず、いまだ多くの成績を求めがたい。また昨今、唯物史觀的な史風の盛行を見る反面、従來の文化史學的傳統はやや不振の觀を呈し、そのような一面的偏向がなお清算されるに至つていないところにも、当面の一課題がある。この書は、著者自身このような見地から歴史学の根本問題を究めつつ、それによつて歴史学の正当にして十全なる立場としての、著者の所謂「文化史学的思考」を確立せんとした、示唆ゆたか

な業績である。

著者石田一良氏は、周知のごとく、現在同志社大学文学部教授、昭和二五年五月「文化史学会」を創め、機關誌「文化史学」を發行して斯学の復興に努めておられる（卷末の著者紹介に詳しい）。氏がこの著をなしたのは、もとよりかりそめの試みではなく、積年の研鑽にかかるその成果であつた。すなわち氏は、その主要部を總括し、それをあらたに一貫した体系にまで整備して、これを大方の諸賢に問おうとせられる。その意味でこの書は、もちろん純然たる學術論文であるが、なほ後進指導への懇切な配慮をもこめて、これを文化史学への良き入門書としても役立つよう意圖されている。

本論はまづ、「まへがき」において、文化的的事実、文化史学、文化史叙述、文化史原論、文化史存在論、文化史認識論の構造關聯を説き、本論の課題の学的所在を明示する。第一章は、歴史的思考の根本的三型態を取り上げ、それを独自の分類法によつて「過去史（実証主義歴史）・現在史（文化史）・未来史（政治史）」なる三者に分ち、その三思考

の根本性格を検討批判しつつ、各々その一面的な限界を指摘する（第一—三節）。そして第四節にこの三思考「科学である所の歴史・芸術である所の歴史・政治である所の歴史」の相関關係を説き、三者を共存させる、より根源的であり高次なる統一的な立場として、著者の所謂「文化史学的思考」を定位する。第三章では「文化史学的思考の根柢」を求めて方法論的な基礎概念を追究し、歴史事象を、人間生命の永遠なる「運命的課題への応答（問柄）の展開」と觀て、これらの諸概念を詳説し（第一節）、それらの把握を可能ならしめる根柢として「運命」の（歴史）内在的超越性と「共感・理解」の構造を指示する（第二節）。第三章は實際上の研究法に關する。まづ「対象」は「応答（問柄）」として、「史料」はむしろ「内的史料」において見出されねばならない（第一節）。またこの方法は、前記「三思考」法の包越において実現せらるべきものにほかならない（第二節）。第四章は結論ともいへば、**「文化史学」はかくて、実証的説明と意味的理解との相即において（第一節）、政治的志向を客觀的認識**

によつて規制する点において（第二節）、まさに過去史・現在史・未來史の批判的止揚者「永遠史」として保証せらるべきものとす

る。次いで「補遺」として、「美術史学と文化史学」および「宗教美術史の課題と方法」なる二題を論ずる。もつて美術史を一例として、一般に特殊専門史は、単に文化史学へ対立すべきではなく、そのままに包摂せらるべきこと、また文化史学は、これらの特殊領域の内面的雙関關係を把握して、「現時の歴史学の分解作用」を解消すべきことを注意する。最後に「附録」として取められた二論文は、その「まへがき」にも詳記されているとおり、著者がこの方法にもとずいて考察した諸論考のうち代表的な二篇を撰んで、その「作業例」を示したものである。

この書が多く有益な示唆にみちていることは、繰り返すまでもない。それだけにまたこの書は、あらたに少なからぬ問題をも注意させずにはいない。ことに本論の主題たる文化史学的思考の推論において、現在史（文化史）を批判するところには、幾分か体系的強

制の感があり、従つて本来的な意味での文化史が氏の所謂文化史学へ止揚せらるべき必然性について、なお十分具体的な明確さが欠けているように思われる。もちろん氏は、それを明確にせんとして、従前の文化史に随伴した歴史の相対主義（ないし歴史認識への懐疑論など）を指摘してそれを克服せんとし、さらに文化史学の基礎概念を探求してそれを学的に基礎づけんと努めている。それに対する氏の努力は明白である。しかし従來の文化史研究として——そのような危険が伴つたにはせよ——必ずしもすべて不可避的に実証的客観性を見失つて、「芸術」的主観性に漂流しなければならなかつたであらうか。また基礎概念の追求も——それを取り上げたのは甚だ教訓的であるが——ことに美術史学方面などではすでに行き尽されているように思われる現状である。（著者の注意する「間柄」も両極的基本概念の特殊な調停關係として規定され、また様式概念の「類型性」も個性的なる作風概念との関聯にせいで考えられている。）基本的にいつて、氏の永遠史としての文化史が、Coce, Dilthey, (Simmel), Hegel, Me-

incke, Hartmannらの（正當に現在の史的なる、あるいは精神的なる）文化史的思考を、原理的な意味でいかに超越しているかについて、なお遺憾なき説明が聴かれないように思うのである。また美術史を一例として、文化史学がそれらの特殊専門史を包摂すると説くところにも、より徹底的な論証がほしい。本書所説の範囲内では、美術史家の側からもなお相當の異論が予想されるように思う。

しかしこれほど深く関心を惹く諸問題を提出しつつ、文化史学の前途へ一指針を掲げ示されたのは、斯学の正しく学的な發展を願うわれわれにとつて、大なる欣びである。妄評には寛恕を乞うて、この書をひろく未読の方々にお薦めしたいと思ふ。（一九五一年七月、同志社大学出版部刊、A5、二〇六頁、二八〇円）

中村二柄

Rural Social Systems

by

Charles P. Loomis and J. Allan Beegle
New York, 1952.

米國に於て「農村に於ける何かの改善の